2DB
二次元ドリーム文庫
Harem Griffon
ハーレムグリフォン
竹内けん illustration ちぇりーな
試し読み版

# ハーレムシリーズの世界

グリンカムビ
ナウシアカ
フェンリル
ターラキア山脈
シュルビー
ベリージャム
サイアリーズ
フレイア
カブス
エバーグリーン
エクスター
ラグナイト
レヴィ
ライオネル
セルベリア
ザウルステール
ガラテイア
カーリング
ヒューリアス
パロムリスト
ニーデンベルグ
フルセン
アヴァロン
サラマンカ
ピーナス
樹海
メリシャント
クィンクエ
タルクィニア
エレオノーラ
クレオンレーゼ
ペルセポネ
イシュタール
ゼビュロア
シェルファニール
シェンロン
西海航路
ダリシン
モンテルナモ
マリア
ローランス
ランチェロ
ラリマール
マルタ
カルロッタ

# 登場人物紹介

CHARACTERS

## レオニード

サブリナ王国出身の撃墜王。
実力も自信もたっぷり。

## エルファバ

『煌星騎士団』の一員で仕事が生きがいという「鉄の女」。しかし一人の女としてセリューンだけには心酔している。

## ハウルカーラ

レオニードとは幼少期から知り合いでオルシーニ王国の名門娘。女が多いグリフォンナイトたちの中でまとめ役をしている。意外と初心で真面目。

## ミラダ

グリフォンの調教師として部隊に同行している。お洒落とは無縁で女っ気はない。趣味はレオニードの女性関係を観察すること。

第一章　トップガン　009
第二章　アイアンメイデン　050
第三章　テイマー　083
第四章　ライトスタッフ　122
第五章　インテリジェンス　159
第六章　エクスプロージョン　209

# 第一章　トップガン

「ひゅ〜、なかなか壮大な眺めだ」

仙樹暦１０３６年。夏。

レオニードの眼下には、白いふかふかな絨毯が続いていた。

頭上を仰ぎ見れば真っ青な大空。ギラギラと輝く太陽。

白い絨毯に思えたのは、モクモクとした入道雲である。

それが唐突に途切れた。

代わって遥か下降。どこまでも広がる緑の大地。そこに蟻たちが働いている。否、人間たちがいた。

その数を数えることは、とっさには不可能だが、事前の情報によると、ざっと十万人といったところであるらしい。

みな武器を持ち、馬を駆け、奇声をあげ、悲鳴をあげ、血飛沫をあげている。

場所はメリシャント地方。そこで行われていた祭り。それはオルシーニ・サブリナ二重王国とドモス王国の決戦であった。

二重王国の王セリューンが率いた兵力は約四万人。ドモス国王ロレントが率いた兵力は

約六万人と言われている。
かねてからいずれ起こるだろうと、誰もが予想していた両雄の対決が、メリシャント王国の領有権を巡って、ついに起こったのだ。
世界の覇権をかけた世紀の一戦ということで、その勝敗の行方を誰もが固唾を呑んで見守っている。
地上の人々が、空を見上げ、指を指し示して、騒ぎ始めた。
「お、敵さん、気づいたようだな」
レオニードはニヤリと笑う。
彼が跨がるもの。それは白い頭部、黄色い嘴（くちばし）。焦げ茶色をした雄大な翼。白い風切羽。鋭い四本の黒い鉤爪を持った動物。
それは鷲に似た形状をしているが、大きさが違う。
両翼はゆうに五メートルはある。こんな鷲は存在しない。まして、その背には鞍が置かれ、人が跨がっている。
この大鳥を「グリフォン」という。
大空の覇者だ。
この世界には、人間を乗せて空を飛べる獣として代表的な生き物が三種類いるといわれている。ドラゴンとペガサスとグリフォンだ。

その中で、もっとも狂暴で、戦闘力のある獣は、固い鱗、鋭い爪、凶悪な牙を持つ、ドラゴンだ。

もっとも乗り心地のいい獣はペガサスだろう。なにせ形状が馬に似ているので、人間との親和性も高い。

グリフォンは鳥である。ドラゴンのような固い鱗はないし、嘴や爪が鋭いといっても、ドラゴンほどではない。

しかし、鳥ゆえに、もっとも空を飛ぶのに適応した体をしていた。

ドラゴンやペガサスに比べて、航続距離は圧倒的に長く、もっとも凱旋能力に優れ、もっとも速く、そして、もっとも高く飛べる。

ただし、他の二種に比べて乗り心地は最悪。所詮は鳥頭、あまり頭もいい動物ではないので、乗る人間の負担は大きく、もっとも扱い辛い獣といえるだろう。

ともかくもその航続距離の長さを利用して、遥か遠方から入道雲の上に隠れて、レオニードたちはやってきたのだ。大鳥兵の数は、およそ百騎あまり。空が黒くなるほどの大群と例えられるに足る規模だ。

レオニードたちの存在に気づいたドモス軍は、慌てて空に向かって弓矢を放つが届かない。代わって飛龍兵たちが散発的にスクランブル発進してきた。

いずれも組織だっての対応ではない。バタバタしているのが遠目にもよくわかる。

「おせーよ」
百騎のグリフォンナイトたちの陣頭に立つレオニードは、サブリナ王国の貴族の三男坊だ。
年齢は十八歳。その年齢に相応(ふさわ)しく瞳は爛々と輝き、不敵な笑みを浮かべている。この世に恐れるものなどなにもないというかのようだ。
簡易な冑を纏い、長い槍と弓を装備している。
「ドモスの女ってのは激しいらしいからな。楽しみだぜ」
「レオード、ふざけるな。この戦の趨勢(すうせい)、我らの活躍いかんにかかわっていると言って過言ではないのだぞ」
そう窘めたのは、同じく大鳥に跨がった同世代の女騎士だ。
豊かなプラチナブロンドが強風に波打つ。秀でた額には羽根飾りをつけ、鼻梁が高く、唇が厚ぼったい。知的で気品の感じられる美貌だ。
女騎士らしい華やかな冑。俗にいうビキニ冑を身に着け、裏地がミント色の白いマントを羽織る。
そんな装いをするだけあって、女らしい凹凸に恵まれた堂々たる体躯は、まるで彫刻のような完成度だ。
その華やかな容姿から「白薔薇の君」などという渾名をつけられている。

彼女もまた、サブリナ王国の名門の出自だ。
名前はハウルカーラといって、同階級なだけにレオニードとは幼少のころから顔見知りである。レオニードと同じように、飛龍騎士に志願した。
その血筋の良さと、カリスマ性を認められて、女グリフォンナイトたちのまとめ役をしている。
グリフォンナイトの約半数は女だ。この世界の空軍では女性の比率が、他の兵種よりも圧倒的に高い。体重の軽い者のほうが航続距離は伸び、小回りも利いて有利という考え方があるのと、魔法との親和性の高さゆえに、間違って墜落したときなどに、生存率が上がるという考え方があるからだ。
もちろん、戦闘においては純粋に力が強いほうが有利であるから、男のほうが戦闘力は優れている。
「ふっ、相変わらずつまらんことをつまらん顔で言う女だ」
レオニードは背後を見る。
「おまえら、俺らは今日、この日のために五年間も準備してきたんだ。その成果をみせる晴れの日だぞ。思いっきり祭りを楽しもうぜ」
「おー！」
グリフォンナイトの兵士たちはみな若い。全員、レオニードと同じ十代だ。みなピクニ

ックにでも来たかのようなはしゃぎっぷりだ。
「おまえというやつは……」
生真面目なハウルカーラは苦々しい表情を浮かべる。そこにレオニードはニヤリと人が悪く笑う。
「あっそうだ。祭りには景品が付き物だな。おまえら、一番敵を多くやったやつに、ハウルカーラが一発やらせてくれるってさ」
「なっ⁉　なにをバカなことを……」
突然のことにハウルカーラは仰天したが、後ろのグリフォンナイトの男たちは歓声をあげる。
「まぁ、一番多く敵を倒すのは俺だけどな。いくぞ！」
景品の抗議など聞く耳持たず、レオニードは手綱を引いた。
「ヒャッホー!!!」
くぇ――――っ!!!
勇ましく一声を鳴いたグリフォンは、急降下を開始した。
「あ、もう！　いくわよ」
文句を飲み込んだハウルカーラも槍を片手に続き、さらにグリフォンナイト百騎も突撃した。

世界が注目したオルシーニ・サブリナ二重王国とドモス王国の決戦第一ラウンドは、ドモス軍の度肝を抜いたグリフォンナイトたちの活躍により、オルシーニ・サブリナ二重王国の圧勝となった。

※

「ドモス軍、撤退していきます！」

オルシーニ・サブリナ王国軍の本陣に、伝令が飛び込んできた。

大陸中を燎原の炎の如く蹂躙してきたドモス軍がついに足止めを食らった瞬間である。

「デムルガストに追撃をさせてあげなさい。あの人はまだ戦い足りないでしょう。しかし、まぁ、念のため深追いは無用、と言い添えなさい。戦争はまだ始まったばかりですからね」

涼やかな顔でそう命じた男こそ、オルシーニ・サブリナ二重王国の国王セリューンである。このとき、二十八歳。

十二歳でオルシーニ王国の軍師となり、メリシャントとヴァスラ両国の王を同時に捕らえるという劇的な登場をしてから、天才の名をほしいままにしてきた男だ。

オルシーニ王国の一貴族。アドリアン領主の生まれに過ぎなかった彼が、オルシーニ王国の女王マリーシアと、サブリナ王国の女王ヴィシュヌと二重結婚をして、二重王国の王として即位したのは、五年前の仙樹暦１０３１年のことである。

このころにはもはや、北のドモス王国の国王ロレントが世界征服を夢見て外征を始めて、

十一年の歳月が経っている。大陸の北部の大半を征服せしめ、その存在感は圧倒的なものとなっていた。

そのため二重王国の成立当初から、いずれドモス王国との激突は、不可避と考えられていた。

いや、セリューンを推戴した人々の思惑は、ドモス王国への対処を託した、というのが真相であったろう。

そういった事情で、鳴り物入りで登極したセリューンは、たちまちのうちに南国のディヴァン、ヴァスラ、シルバーナ、モンテルモナといった国々を支配下に置いていく。

もともと大国として知られたオルシーニ王国とサブリナ王国が統合したのである。

その国力は南部の諸国では太刀打ちできない冠絶した存在であったのだ。

しかし、セリューンは、ドモス王国のように他国を武力占領しようとはしなかった。外交で味方を増やし、いうことを聞かない国には兵を派遣して、国家の首脳部を取り換えて、親二重王国政権を作らせた。

そのためオルシーニ・サブリナ二重王国ができたからといって、領土はまったく増えなかった。しかし、セリューンの動かせる兵力は増えていった。

ドモス王国のように他国を一々攻め滅ぼしていたのでは、勝ったとしても味方も無傷ではいられないし、せっかく占領した土地にしても、戦禍によって国力は払底してしまって

いる。また、その土地の民の恨みを買ってしまっているから統治するのも大変だ。
それに対して、セリューンのやり方では、国力を極力温存して、利益のみを得るというものであった。
ドモス国王ロレントが即位してから十六年。血みどろになって戦いに戦いまくって手に入れた国力に勝るとも劣らぬ力を、二重王国の王セリューンは即位からわずか五年で整えてしまったのである。
その奇術のような手並みに人々は呆気に取られた。セリューンの国家戦略は、分断統治といわれる。南国の国々は、独立国としての誇りをもちながら、その裏側でセリューンに支配されたのである。
「なお、ドモス軍の飛龍騎士を撃破すること五十三騎。我が軍の大鳥騎士の損害なし!!!」
伝令は興奮を隠しきれずに叫んだ。
「おお」
陣屋にいた人々が歓声をあげる。
「そいつはまた、派手なお披露目になりましたね」
「想定通りじゃないの?」
腹心である女男爵リサイアの皮肉な言葉に、セリューンは肩を竦める。
「まさか、ここまでは想定していないよ。グリフォンナイトたちの頑張りを素直に讃えよ

う。あの子たちはよくやってくれた」

即位したセリューンが硬軟自在の外交戦を展開していた裏で行っていた極秘プロジェクトがある。

オルシーニ王国とサブリナ王国の貴族の子弟。家督を継げない次男以下の若者たちの中でも、若く勇敢な者たちを二百人ばかり集めてランチェロ王国に留学させたのだ。

大陸の南西にある密林の国ランチェロ王国。この国はいささか距離が遠いこともあって、二重王国を盟主とした属国に入ったわけではなかった。しかし、セリューンは即位と同時に通商条約を結んでいる。

この地域では、多くのグリフォンが生息しており、人の手によって飼育もされて、人が乗ることも珍しくなかった。当然、軍事にも利用されていたが、ランチェロという国の存在感がなかったこともあり、この兵種もメジャーではなった。

他国にもグリフォンはいるにはいたのだが、数が揃わないので基本的に伝令や偵察に利用されるぐらいであった。

しかし、セリューンはこの動物に目を付ける。

いずれドモス王国との対決は不可避だ。そして、その軍勢の二大看板といえば、騎馬隊と飛龍隊である。

精強さではドモスにかなわなくとも、騎馬隊ならばどこの国にでもある。しかし、飛龍

騎士は極めて高度な専門職であり、一朝一夕に編成することはできない。そのためドモスの飛龍軍団に対抗するために、空軍の育成は急務と考えたのだ。

そこで国内の貴族の家督を継げない子弟たちの中でも、レオニードやハウルカーラといった十代前半の少年少女たちを選んで留学させ、グリフォンナイトの修行をさせたのである。

なにせまったく新しい兵種であるから、下手な先入観を持たない若い者のほうがいい、と考えたのだ。

いわばグリフォンナイト部隊は、今日このときのために五年間の歳月をかけて用意された、二重王国の秘密兵器である。

「あれから五年か」

セリューンの妻の一人、サブリナ王国の女王ヴィシュヌが感慨深げに頷く。

「事故死した者も多いと聞きます」

もう一人の妻、オルシーニ王国の女王マリーシアが痛ましげに眉を顰（ひそ）める。

なにせ空を飛んでいるのだ。他の兵種よりも、圧倒的に死亡率が高い。

年に二割の人間が亡くなっていくという壮絶な練兵となった。

「しかし、その苦労は報われたと申せましょう。これでドモス王国のアドバンテージの一つは潰されました。ドモス王国の動きは否応なく鈍くなる。そうなればいろいろと面白い

ことになりましょう」
ヴィシュヌの腹心で『氷花美人』と称えられる女将軍シャリエラが、氷の微笑で頷く。
オルシーニ王国の軍事専門家にせよ、サブリナ王国の軍事専門家にせよ、グリフォンナイトなどという部隊を運営したことがない。
そんな海のものとも山のものともわからない実戦経験のない部隊を、いわば空軍の本家にぶつけてみたのだ。
経験の差から一方的に虐殺されてもおかしくなかった。それが完勝したというのだから、みな笑みも零れる。
二重王国が用意できたグリフォンナイトは、わずか百騎に過ぎない。とはいえ、敵味方に与えた衝撃は大きい。特にドモス軍にとっては、まさに雷に打たれたかのような気分であろう。
強大な飛龍軍団を擁するドモス王国軍は、ドモス国王ロレントが世界征服に乗り出してから、実に十六年間。制空権は彼らのものであった。
もちろん、各国に伝令用のドラゴンやペガサスや大鳥、あるいは飛翔魔法に長けた魔法使いはいた。しかし、絶対数が少なく、戦闘に参加してきても、単騎ないし、片手で数えられる程度の数でしかなかった。
しかし、このときドモス軍は自分たち以外の、空の軍団と初めて遭遇したのだ。

さらにいえば、この空軍は飛龍兵と戦うことを想定し、訓練されてきた部隊だったのである。

例えていうならば、ドモス軍の飛龍軍団は爆撃機の群れに過ぎなかった。そこに戦闘機の群れが襲い掛かったのである。

勝敗が一方的なものになるのも、当然というものだろう。

「理屈の上では上手くいきそうだとは思っていたが、ここまで上手くいくとはね。さすがわたしの見込んだ旦那様だ。この子のためにも勝つわよ」

ヴィシュヌは自らの腹を軽く押さえた。

まだ目立ってはいないが、その腹の中にはセリューンの子供がいる。

大人しいお姫様気質のマリーシアに対して、ヴィシュヌは戦場で陣頭指揮をする女傑として知られていた。

女王の懐妊は喜ばしいことなのだが、この大事な決戦時に圧倒的なカリスマを持った優秀な指揮官を最前線に出せなくなったのは、いささか痛い。

ちなみにセリューンの子供という意味では、エイドリアンという昔馴染みの側室が一子儲けているが、それは国際政治上では、相手にされていない。

ヴィシュヌの腹の子こそ、いろいろな意味で重要なのだ。

「エルファバ」

不意にセリューンは幕僚の一人を呼んだ。
「はっ」
進み出たのは、短い黒髪にベレー帽をかぶり、黒縁のメガネでも隠しきれないきつい眼差し、薄い唇をきつく結ぶ。犀利な顔には化粧っ気はまるでない。細身の身体を軍服に包んだ、三十がらみの女である。
まさに典型的な女軍人だ。
彼女は二重王国傘下のモンテルモナ王国の出身で、有能な軍事理論家として知られた。モンテルモナ王国が二重王国に加盟するときに積極的に運動したこともあり、セリューン直属の諮問機関『煌星騎士団』の一員として抜擢されていた。
『煌星騎士団』の一員になるというのは、二重王国に加盟する者にとって最高の栄誉とされている。
門地や領地と関係なく、有能な者が選ばれ、その権力は各国の王の上位者として振る舞うことが許された。
「今後、グリフォンナイトの指揮運用はキミに一任する。思うようにやりなさい」
「しょ、小官がでありますか？」
エルファバは意外な表情を隠しきれなかった。
「不満かい？」

「いえ、グリフォンナイトは陛下直属の部隊として運用なされるのだとばかり思っておりましたもので……」

「キミのグリフォンナイトの運用の論文は読ませていただきました。よってキミが適任だと判断したんですよ」

躊躇する女将軍に、セリューンはにっこりと女殺しと呼ばれる笑みを浮かべる。

その笑みを向けられた女は、無言のままパンツを脱いで尻を差し出す、などという与太話があるほどだ。

いかにも仕事一筋といった雰囲気のエルファバもまた、例外ではなく、頬が染まって、目が泳ぐ。

「あ、ありがとうございます。陛下のご期待に応えるよう、鋭意努力いたします」

大任を与えられることは信頼されている証、と喜ぶタイプなのだろう。

頬を紅潮させたまま敬礼したエルファバは、背筋を伸ばして誇らしげに退出していった。

それを見送ってからリサイアが、質問する。

「で、本音は？」

セリューンは嫌そうに顔を顰(しか)めた。

「グリフォンナイトのやつらって、みんな十代の生意気盛りだよ。その上、全員貴族の子弟ときた。今回のことでたぶん、一段と調子に乗っているだろうしさ。正直、直接相手を

するのはすごい疲れると思うんだ」
「うっ、それは確かに疲れそう……」
セリューンの気持ちを理解して、リサイアもげんなりとした顔になる。
「あの娘、苦労するだろうなぁ」
軍人として、軍事理論家として、あるいは作戦参謀としては有能な人物だが、学校の教師のような役どころは勝手が違うことだろう。
おそらく貧乏籤を引かされたなどと露ほども自覚していないだろう、エルファバのことを思って、その場にいた人々は同情した。

※

セリューンに生意気盛りといわれたグリフォンナイトの部隊にあって、もっとも生意気な男は、独りで十一騎の飛龍を落としてみせた。
二番目のハウルカーラで五騎であったから、ダントツの一位だ。
「さて、約束通り、一発させていただこうか」
帰陣したレオニードは大鳥の厩舎で、ハウルカーラに詰め寄っていた。
「そんな約束をした覚えはない！」
貞操の危機にさらされたハウルカーラは、憤然と吐き捨てると、厩舎を出ていこうとしたが、その右手首を掴まれる。

ようやくその気になった女の気が変わらないうちに、レオニードはただちに押し倒そうとした。しかし、ここに至って、ハウルカーラは待ったをかける。

「ま、待って。でも、こんなところでは……」

不安げにハウルカーラはあたりを窺う。

そこは大鳥の厩舎の中である。近くには大鳥たちがおり、騒がしい鳴き声がし、糞尿の匂いも漂っていた。お世辞にもロマンチックの欠片もない場所だ。

女として、あるいは貴族の娘として、このような場所で男に身を任すことは不本意であろう。

しかし、盛りの付いた牡は却下した。

「駄目だ、もう我慢できない」

「そ、それじゃ、せめてもう一つの願いは聞いて」

「なんだ？」

背後を反り返るようにして見上げたハウルカーラは、必死にレオニードの瞳を見つめながら懇願した。

「キ、キスをして……」

「ん？」

「セックスの前に、あなたとキスしたい」

えっちシーン試し読み ここからスタート!

ハウルカーラの細やかな願望に、レオニードは応えることにした。
「ああ、わかったぜ」
いきなり、ハウルカーラの厚ぼったい唇に、唇を重ねた。
「んっ」
ハウルカーラは両腕をあげて、反り返るようにして背後のレオニードの頭を抱く。
「うん、うん、うん……」
レオニードの舌が、官能的な唇を割り、前歯を舐め、そして、舌を絡め。唾液を交換する。
男の荒々しくも濃厚な接吻を、ハウルカーラはのけぞるようにして必死に受け止める。
やがてハウルカーラの身体から力が抜けたところを見澄まして、接吻を終えた。
「これで満足か」
トロンとした表情になってしまったハウルカーラは、レオニードの瞳を見つめながら訴える。
「レオニード、好き。昔から好きだった。でも、他の女にばっかりちょっかいだして、あたしにぜんぜん声をかけてこないから、好みじゃないんだと思っていた」
「ああ、俺も好きだったぜ。ただおまえは美人すぎて、真面目だし、俺みたいな不良は嫌いなんだと思っていた。だから、こうでもしないと口説けなかったのさ」

「そ、そうなんだ。う、嬉しい。あ、あたしも実は……」
漁色家の男の口車に乗せられてしまったハウルカーラの表情は、完全に恋する乙女だ。
「なら今度は、ショーツを脱いで、尻をこっちに差し出しな」
「はい……こ、こう……」
男の命令に素直に従って、ハウルカーラは自ら白いミニスカートの中に両手を入れて、黒いブーメランショーツをするすると下ろす。
その股繰り部分と股間の間には、とろっとろの濃厚な蜜が糸を引いている。
ショーツが太腿の半ばまで達したところで、レオニードは新たな命令を出す。
「お尻を広げて、おまえのオマ○コを見せろよ」
「そ、そんな恥ずかしい……」
「見たいんだよ。おまえのオマ○コ」
レオニードが強く命じると、ハウルカーラは困った顔をしながらも、しぶしぶ自ら両手をお尻に回し、尻朶を割った。
肛門があらわとなる。そして、陰唇も晒してしまう。
「その姿いいな。白薔薇の君なんて呼ばれているおまえが、男の前でそんな恰好しているなんて、誰も思わないだろうな」
「言わないで……レオニードが見たいって言うからあたしは……」

自分でもなぜこのような痴態をしているのか、わからないと言いたげな表情をしながらも、全身からぬめるような淫汗が噴き出している。

「それにしても、もったいつけていたわりには、いい具合に濡れているじゃねぇか。水飴でもまぶしたみたいにドロドロだ」

「は、恥ずかしい……」

毒を食らわば皿までという心境なのかもしれないが、男から恥ずかしい命令を受けることが、あたかも愛されているゆえと感じて、喜んで従ってしまう。マゾ的な思考に陥っているようにみえる。

レオニードは右手を伸ばし、人差し指で陰唇を撫でた。

「ああ」

チュクチュクチュクチュ……。

わざと卑猥な水音をたててやる。

羞恥にプルプルと震えながらもハウルカーラは、男からの辱めに必死に耐えた。

やがて、陰唇から掬い上げた女蜜のたっぷりとかかった右手の人差し指を、口元に運びペロリと舐める。

「美味いな。これがおまえの味か。白薔薇の君の垂らした液体だから、これはさながら薔薇水といったところか」

「そ、そんな辱めないで、やるなら、早く……」
「なんだ。おまえもなんだかんだ言って、ちんぽ早く食いたいんだな。なら、もっとはっきりとおねだりしな」
揶揄されたハウルカーラは、一段と耳を赤くしたが、小さな声で懇願する。
「な、なんて言えばいいの……」
「思ったままのことをそのままに」
そこでハウルカーラは考え考え答える。
「お、おちんちん、入れて。あたしのオマ〇コの中に、レオニードのおちんちんが欲しいの」
「そこまで言われたら仕方ないな。おちんちん入れてやるぜ」
始めはレオニードに言い寄られて困っていたというのに、いつのまにかハウルカーラのほうから、肉交を懇願するようになってしまっていた。そのことの矛盾に本人は気づいていないようである。
レオニードはむっちりとした尻を掴み、いきり立つ逸物を、女の肉門に添えた。
「ああん♪」
「その柱にしっかりと掴まっていろ」
すっかり従順になってしまったハウルカーラは、家畜小屋の細い柱を両手で掴む。

「くわ」
大鳥の鳴き声がして、顔をあげたハウルカーラは、目の前で鳥を見てしまったようだ。そのせいで、現実に立ち返ってしまった。
「ま、待って、あたしは、やっぱり、こんなところで、はじめては……いや――――!!!」
ズボッ!!!
ハウルカーラの懇願虚しく、その肉体を逸物が一気に押し貫く。
ブチンッとした処女膜の裂ける手ごたえが、逸物から伝わってきた。充実した白い太腿の内側に、ツーと赤い滴が流れる。
「なんだ、おまえ初めてだったのか？」
コココク！
柱を必死に抱きしめたハウルカーラは声もなく、必死に頷く。
「白薔薇の君なんて呼ばれて、チヤホヤされているようだから、隠れて男をいっぱい食っていると思ったんだがな」
「自分がそうだからって、他人までそうだと思わないで。あたし、そんな軽い女じゃないわ」
目を閉じ、必死に反論するハウルカーラの瞼から溢れた涙が、形のいい頬を流れる。
「仕方ねぇな、ほら」

さすがに罪悪感を覚えたレオニードは、右手を前に回し、男女の結合部を弄ると包皮に包まれている陰核を摘まんだ。
「ひっ」
「破瓜中でも、ここを弄られると気持ちいいだろ？」
包皮の中で突起している肉芽を、クリクリと弄りまわす。
「はっ、な、なに、そこ……ああ、し、痺れる」
「ん？　おまえもしかして、もしかして、ここも触ったことないとか吐かすわけ？」
小首を傾げるレオニードに、ハウルカーラは嫌悪もあらわに応じる。
「な、ないわ。そんな汚らわしいところ触るはずがないでしょ」
「っ」
その返答には、レオニードは目を剥いてしまった。しかしながら、これは潔癖な処女にはありがちなことなのだろう。快感がなぜか悪いことのような気がして、触れるのを躊躇ってしまうのだ。
性欲にしても、身体を動かすことを常としている女は、運動のうちに発散してしまうから、オナニーなどをしなくてもいい。
「それはそれはお上品なことで。でもまぁ、おまえの身体は一級品だからな。オマ〇コの具合は最高にいいぜ」

適当に煽てながら、レオニードは腰をリズミカルに動かす。
ザクザクザク……。
「レオニードに喜んでもらえて、嬉しい……」
破瓜の最中である。男には想像もつかない痛みに必死に耐えているのだろうに、ハウルカーラは嬉しそうな声を出す。
どうやらハウルカーラは、気位の高そうな外見とは裏腹に、どマゾ体質のようである。
「あ、足が萎える……もう立っていられない」
「もっと踏ん張れよ」
横暴な男の命令に、健気な女は、必死に柱を握りしめて耐える。しかし、その両足はだらしなく蟹股開きとなって、力なくプルプルと震えてしまう。
美しくも凛々しい理想的な女グリフォンナイトとみなに思われている者とは思えぬ、哀れな痴態だ。
パン！　パン！　パン！
健康的な女の尻肉に、男の腰が叩きつけられる拍手音が鳴り響く。そのたびに大きな乳房もプルンプルンと犯罪的に揺れてみせてくれるから、牝を犯しているという充実感がハンパない。
（くー、オマ〇コ締まるし、どこもかしこもムチムチだし、こういうのを抱き心地のいい

女っていうんだろうな。たまんねぇ）
自然とレオニードの腰使いは激しくなる。
「あぁ、あぁ、あぁ」
圧倒的な牡に犯されて屈服する悦び、というのが女にはあるようで、決して優しくない男に犯されながら、ハウルカーラの口元からは牝の吐息がひそやかに漏れた。
（はじめてだってのにもう感じてやがる。これは仕込みがいがある女だぜ）
圧倒的な牝に捉えられた肉棒を、キュッキュッと締められて、レオニードは我慢の限界に達したが、漁色家の意地で、なんでもない風を装って告げる。
「そろそろ出すぞ」
「あ、ナカは、ナカはやめて」
「なんでだ？　魔法で掃除すればいいだけだろ」
小首を傾げるレオニードに、背後から犯されているハウルカーラは必死に訴える。
「で、でも……万が一ってこともあるし、いままだ戦時下だし、妊娠したら困る」
「戦時下だからこそ、後悔を残さないようにしないとな。セックスは中出しで楽しんでこそだろ」
口ではなんだかんだと理屈をこねながらも、その実、我慢の限界に達していたレオニードは容赦なく逸物を最深部まで叩き込んだ。

「あはは、やっぱ司令官殿、かわいいわ」
年下の男にかわいい呼ばわりされて憤死しそうなエルファバの膣穴からいったん指を離したレオニードは、次いでぷっくり膨らんだ陰核に触れる。
「お、いい具合にクリトリスの包皮が剥けているじゃないですか？　司令官殿はクリトリス派ってことですね。オナニーのときはクリトリスを弄るのが好きでしょ」
「そ、そんなことは……ひぃはぁ」
レオニードの指が、陰核を一点責めで捏ね回す。
「そ、そこはらめぇ、そこ弄られたら、わたし……ああん」
「気持ちいいみたいですね。でも、クリトリスは指で弄るよりも、気持ちよくなれる方法があるんですよ」
もったいぶっていったん言葉を切ったレオニードは、メガネの奥で涙目となっているエルファバの瞳を覗き込みながら、卑猥な舌なめずりをする。
「舌で舐める」
「っ!!!」
「舐めてあげましょうか？　クンニリングスは気持ちいいですよ。クンニリングスが嫌いな女はいませんからね」

えっちシーン試し読み ここからスタート!

イヤイヤと首を左右に振りながら、エルファバは動揺の声を出す。
「で、でも、わたし、その……風呂入ってないし、そこ……汚い」
「別に気にしませんって。それよりも舐めて欲しいですか？　欲しくないですか？」
「な、舐めて欲しいレェス」
本当に陰核が弱点なのだろう。剥きだしの陰核を摘まみあげられて、扱きあげられたエルファバは、陰唇全体から失禁しているかのように蜜を垂れ流し、呂律も回らなくなってしまった。
「だいぶ素直になったな。なら舐めてやるよ」
いったん陰核から指を離したレオニードは、エルファバの両の膝の裏を持ち押さえこみ、天高くさらされた女唇に顔を近づけると、卑猥に伸ばした舌先で、会陰部から船底を通って陰核までゆっくりと舐めあげた。
「ひぃぃ、なにこれ、ヤダ、指とぜんぜん違う♪」
マングリ返し状態の女は、秘部を舐められてすすり泣く。
男は舌をしなやかに動かし、女の襞の隅々まで舐め回す。
「気持ちいいなら気持ちいいと言ってもらえると、俺としても張り切るんですがね」
「き、気持ち、いい……気持ちいい♪　気持ちいい♪　気持ちいい♪」
一度箍が外れてしまうと、もはや止まれないようだった。エルファバは自ら両手で、膝

の裏を抱えて、男にすべてを差し出して、気持ちいいを連呼してしまった。
自己申告した通り、女に喜んでいてもらえると思えば、男としても自然と気合いが入ってやる気もでる。
レオニードは舌を高速回転させた。
ピチャピチャピチャピチャ……。
「あああ、そこらめぇぇぇぇぇ♪」
三十路近くまでオナニー一筋、陰核ばかり弄っていたせいか、陰核の性感帯だけが異様に発達しているようだ。
それと察したレオニードは、陰核を集中的に舐め回す。
「ひぃ、ひぃ、ひぃ、そこ、そこ、そこ、そこ、いい、いい、いい、気持ちいいのぉぉぉ」
自分の手でやるのとは違う。自分では制御のできない快感に翻弄されて、理性の塊のような女が、いまや理性を投げ捨てて、ただの牝の本能に支配されている。
(いい表情だ♪)
「もう、ダメェ、イクゥゥゥゥゥゥゥッ!!!」
ビクン! ビクン! ビクン!
二つ折りにされていたエルファバの身体が激しく痙攣する。
それを確認してから、レオニードは身を起こし、いきり立つ逸物を、痙攣する膣穴に添

えた。
「入れるぞ。いいよな」
「うん……」
クンニ絶頂の余韻に浸るエルファバは、含羞を噛みしめるように顔を背けながらも、コクリと頷く。
もうすっかり、男に貫かれることを待ちわびるかわいい女になってしまった。
「できるだけ、力を抜いてくださいね」
「わ、わかったひぃぃ」
逸物の切っ先になにかが当たった。処女膜だろう。
それがなかなかに硬い。
二十代後半、三十路直前の女である。いわゆる処女膜硬化を起こしてしまっているのだろう。
（まさに鉄の女だな。しかし、貫く）
レオニードは気合いを入れて、一気に腰を落とす。
ブツン！
難攻不落を誇った鋼鉄の処女膜はついに破れた。
「ひぃぃぃぃぃぃぃ!!!」

鉄の女の仮面が完全に割れた。両目から涙が溢れている。奥歯を食いしばるも、薄い唇がめくれ、白い歯並の狭間から、乙女の断末魔の声が漏れる。
ギッチギチの膣洞で、不埒なる侵入者を絞め殺そうとするかのように締め上げてきた。
高く翳された両足がヒクヒクと痙攣している。
「司令官殿、オマ〇コから力を抜いて。それじゃ、かえって痛いですよ」
「そ、そんなこと言われても、大きい。大きすぎる。ああ、こんなに大きいだなんて、ぐ、はぁ、はぁ」
我を忘れたエルファバは必死にレオニードの背中に腕を回して、抱き着いてきた。
いまはなにを言っても無駄だろうと諦めて、落ち着くのを待っていると、次第にきつかった膣圧も緩くなってくる。そうなるとザラザラの肉壁がまるで肉棒に吸い付くように絡みついてきた。
破瓜直後とはいえ、三十路直前の女。男を迎え入れる器として完成しているということだろう。
「ふぅ……それじゃ、そろそろ動きますね」
「うん」
どうにか落ち着いたらしいエルファバは、涙目ながら素直に頷く。それを受けて、レオニードは掘削を開始した。

ズコ、ズコ、ズコ！

「あ、すごい、太い。太いおちんちんが、奥に、奥に、当たっている。ズンズンって、ハヒィ～」

知的な女も、こうなってしまったらただの牝である。

（やっぱり、シャリエラさんを思い出すな。いや、シャリエラさんよりいい女にしてやる。女は男次第ってよく言うもんな）

張り切ったレオニードは、リズミカルに腰を叩き込む。

ズボズボズボ！

「ひぃ、ひぃ、ひぃ、し、子宮？　子宮が揺れちゃう。揺れちゃうの？　あ、ダメ、そんな、激しくされたら、ああ、熱い、熱い、熱い、イクイクイクイク、イク――!!!」

ビクビクビクビク……。

エルファバの膣洞が激しく痙攣した。絶頂痙攣であることをレオニードは察することができたが、それを無視して同じ速度で掘削を続ける。

「ひぃ、わたし、イった。いま、イったの」

「そうみたいっすね。でもまだまだです。このままヌカロク決めますんで、覚悟してください」

「ウソ、そんな、ムリ、ムリムリ……ああ」

泣きわめく女を押さえつけ、レオニードは掘削を続けた。
いわゆる種付けホールドの体勢である。これで若く活きのいい男。それも一騎当千の男に上に乗られては、女は身動きが取れない。
その状態で延々と休みなく、ドスドスと子宮口を突きまわされたのだ。どんなに知的な女でも、牝は牝である。理性を保てなかった。
ビクン！　ドクン！　と面白いように絶頂を繰り返してくれる。
「ひぃ、またイった。またイっちゃったの！　も、もう許して、これ以上、イかされたら、おかしくなるおかしくなる。おちんぽ、おちんぽのことしか考えられなくなっちゃう♪　あは、バカになる♪　バカになっちゃう♪　オマ〇コが焼ける♪　オマ〇コがいい♪　オマ〇コがいいの♪　おちんちんにオマ〇コを掘られるの最高♪」
同じ体位でただ逸物を掘削しているだけとはいえ、その太さと力感は並ではない。子宮口をえぐりまわされて、エルファバは五回も連続絶頂してしまった。
鉄の女と称された才媛が、いまや涙を流し、涎を噴き、鼻水を垂らして見る影もないアヘ顔で、隠語を連発している。
「いいですね。司令官殿の女の顔。いや、もう司令官殿ではなく、エルファバと呼ぶべきだな。俺の女だし。そろそろ俺もイきますよ」
「い、いくってなに、あ、ひぃぃぃ、おちんちんがまた一段と大きくなって、ビクビクビ

クしているっ⁉　はぁ⁉　まさか！　中に、中に出すつもり⁉　それだけはやめて、それだけは許してぇぇぇ！」

懇願する声とは裏腹に、牡の子種を求める本能に従い、エルファバは全身でレオニードを抱きしめ、腰を押し上げてくる。子宮口に亀頭部がぶち当たり、突き破りそうだ。

そして、エルファバの体内を荒らしまわり、微動だにしないかに思われていた剛直が変化した。それを察した女はさらに喜びに震える。

「はぁ、これは、く、くるの？」

「くっ」

レオニードは逸物をぐいっと押し込み、子宮口を捉えた形で爆発させた。

ドクン！　ドクン！　ドクン！

「はぁぁぁぁ、来た、きちゃった。熱いものがビュービュー♪　気持ちいいいいいいいいいいいいいい」

膣口から串刺しにされた女は、口唇から切っ先を出すかのようにのけぞり、大口を開けた。

プシュッ！

レオニードの下腹部に熱い飛沫がかかる。どうやら、エルファバは失禁してしまったようだ。

破瓜の最中だというのに、容赦ない掘削に続く膣内射精。独り寂しい自涜では決して味わうことのできない、真の意味での女の喜びに、体中の力が抜けてしまったようだ。

思う存分に射精してから、レオニードは小さくなった逸物を引き抜いた。

「はぁ～」

草むらの上で、エルファバは両足を揃えて頭上にあげたまま脱力していた。

その膣穴からは、ドプドプと自分でもよく出したものだ、と感心するほどの白い液体が溢れだした。少しだけピンク色が混じっている。

「大丈夫ですか。司令官殿のオマ〇コがあんまりにも気持ちよかったから、つい夢中になってしまいました。すいません」

下手に出たレオニードは綺麗なハンカチで、エルファバの股間を拭ってやる。

穢れを処理されるエルファバは羞恥に身を硬くしながらも、なんとか威厳を取り戻そうと試みる。

「こ、これがたらし男のテクニックというわけか？　まぁ、よい気分転換になったと言っておこう」

「オマ〇コをおちんちんでズコズコされるの最高なんでしょ。またしようぜ」

最高に高まっていたときの台詞を模写されて、エルファバは酢を飲んだような表情になる。

泣き笑いの声で元気よく応じるミラダに続いて現れたエルファバまで涙ぐんでいた。
「本当に無事でよかった」
エルファバだけでなく、その場にいる全員が泣いている。
「まさか司令官殿にまでそのように心配していただけるとは思わなかった」
まさに鬼の目にも涙だ、と冗談を言おうと思ったが思いとどまる。
みなが泣いているのは単にレオニードの生死を心配したからではあるまい。それだけ大勢の仲間が死んだ、ということだろう。
紳士ぶったレオニードはハンカチで、エルファバのメガネの下を拭ってやりながら質問した。
「結局、戦は俺たちの勝利ってことでいいのか？」
ハンカチを奪い取ったエルファバは、それで鼻をかみ、なんとか平静さを取り戻したのだろう。考え考えしながら答える。
「残念ながら、今日の戦闘だけを見れば引き分けだな」
「そっか、戦いはまだまだ続くということか……」
骨折り損のくたびれ儲け、といったところだろうか。さすがに脱力した気分になる。
「ああ、しかし、今回の戦いは、死傷者を出しすぎた。仮にも一国の首都を消滅させてしまったほどだ。お互い牙は折れた。これ以上の継戦能力はお互いにあるまい」

えっちシーン試し読み ここからスタート!

グリフォンナイト隊も、半減してしまっている。しばらくは作戦行動がとれそうもない、ということはレオニードにもわかった。
「ここからは意地の張り合いだ。いかに面子を保てる形で和睦という形に持っていくかの駆け引きとなる」
「なるほど……」
相槌を打ったところでレオニードは、はたと気づく。
あまりにもみなが意気消沈している。まだ戦争が続くというのに、これではマズイだろう。
レオニードは無理やり明るく振る舞うことにした。
「まぁ、戦争はいつでもできる。ということで、司令官殿。生きているうちは、生きている悦びを楽しもうぜ」
逞しい猿臂を伸ばしたレオニードは、エルファバを抱き寄せると、自らの右肩に抱えあげた。
「ちょ、ちょっとなにをっ⁉」
「司令官殿も聞いたことがあるでしょ。男ってのは戦が終わると無性に女が欲しくなる生き物なんですよ」
じたばた暴れるエルファバの尻をパシと鼓のように叩く。

そこにハウルカーラが抗議の声をあげる。
「ちょ、ちょっと出陣前に約束したはずよ。お互い生き残ったときの一番槍はあたしって」
「仕方ねぇ淫乱女だな。ならおまえも来い。それからミラダ、おまえの見たがっていた司令官のアヘ顔を見せてやる」
「やったー、見たいです♪」
心から信頼する騎手と再会して安心したのだろう。ミラダは無邪気に飛び跳ねて喜ぶ。
レオニードのいつもと変わらぬ漁色家ぶりに、仲間たちは呆れながらも安堵した。
この隊長がいる限り、俺たちは大丈夫だ、という根拠のない安心感に包まれたのだ。

※

「よし！　やるぞ～♪」
女たちを引き連れたレオニードは、適当な陣屋に入ると、まずは担いでいたエルファバの軍服をぞんざいに剥いて寝台の上に放り投げた。
「キャッ」
悲鳴をあげるエルファバに続いて、背後から付いてきていたハウルカーラもまた裸に剥いて寝台に放る。
「ちょ、ちょっと乱暴に扱わないでよ」
「うるせぇ。いま俺はものすごく滾っているんだ。ほら、ミラダだ。おまえもだ」

小柄なミラダもまた裸に剥いて、犬の子のように寝台に放る。
「キャハ♪」
ミラダは楽しげに笑いながら、寝台に乗る。
こうして、三人の美女美少女を寝台に入れたところで、レオニードは軍服を脱ぎ捨てた。
ブルン！
逸物が臍に届かんばかりに反り返る。
戦闘中の逸物はこれ以上ないほどに縮こまるものだが、戦闘後は反動とでもいうかのようにいきり立ってしまう。
「ごくり……」
女としての見栄から、抵抗するふりをしていたエルファバとハウルカーラは、逸物を一目見て、生唾を飲んだ。ミラダは満面の笑みである。
「さて、どいつからいただこうか？」
意気揚々と舌なめずりをしたレオニードは、肉槍を翳して女体の雲へと飛び込む。
「あ、こら、いきなりそうくる。あん」
「だ、ダメ、そこダメ」
寝台に腰を下ろしたレオニードは、エルファバとハウルカーラを並べて背後から抱きしめて、右手で漆黒の陰毛、左手で白金の陰毛に彩られた股間をまさぐる。

「ミラダ、この痴女どものおっぱいを吸ってやれ」
「はいは～い♪」
陽気に請け負ったミラダは、爆乳お姉さんと熟乳お姉さんの前で、小さな手をワキワキと開閉させる。
「おっぱいって一度触ってみたかったんっすよねぇ～♪」
「こ、こら、おまえも女だろ」
「そ、そうよ。別にいまは小さくてもすぐに大きく、ああ」
ハウルカーラは引き気味に応じ、エルファバは大人の女として諭すが、ミラダは聞く耳を持たなかった。
「それじゃいくっす～♪」
三人の向かいに膝立ちになったミラダは、左手でハウルカーラ、右手でエルファバの乳房を捉えると、その弾力を楽しむようにモミモミと揉んだ。
「ああん」
「おお、すごい、ふわふわっす♪」
大人の女の乳房を揉みまくりながら感動の声をあげたミラダは、さらにピンク色の乳首に口づけした。
「はぁ～ん、やめなさ～い♪」

同性、それも年下の少女に、乳房を弄ばれて、乳首を吸われるなど屈辱だろうが、ハウルカーラも、エルファバも明らかにMっ気の強い女たちだ。恥辱に震えながらも、気持ちよさそうに牝声をあげる。

逆にミラダは、ひそかにSっ気のある少女なのかもしれない。恥辱に悶えるオネエサマたちの痴態を堪能しつつ、とっても嬉しそうに乳首をチュウチュウと吸う。合計四つの乳首を交互に吸っていたが、やがて煩わしくなってきたのだろう。二人の乳房の内側のほうを合わせて抱き寄せると、二つの乳首を同時に含んで、しゃぶり始めた。

「ちょ、ちょっと、こんなのダメぇぇぇ」

「レオニード、貴様。こんな若い子にこんなエッチなことを教え込むなんて、は、犯罪よ」

言葉とは裏腹に、ハウルカーラとエルファバの身体は、大いに高まってきているようだ。

クチュリクチュリクチュリ……。

レオニードに指マンされている彼女たちの股間からは、恥ずかしい水音が音高く聞こえてくる。

大人のおっぱいを揉みながら、乳首をしゃぶっているミラダもまた、切なげに細い内腿をこすり合わせながら、小さな尻をくねらせていた。

その可愛らしい光景に気づいたレオニードは苦笑する。

「ミラダ、そのまま立ち上がって、俺の顔を跨がれよ」

「え、そんなこと……」
「大丈夫だって、俺はいま両手を離せないからな。おまえのオマ〇コ、舐めてやるよ」
レオニードの提案を受けて、ミラダは躊躇い、恥ずかしそうにしながらも立ち上がると、両腕で美女を抱きかかえている男の顔に、恐る恐る跨がる。
「こ、これでいいっすか？」
「ああ、ばっちりだ」
ミラダの陰唇には産毛程度しか生えていない。そのためいきなり亀裂が覗く。そこをペロリと一舐めする。
「はぅ～♪」
水鳥のように細い両足を震わせたミラダは、両手でレオニードの頭髪を掴みながら、気持ちよさそうにのけぞる。
（さてと、三人同時にイかせてやるか♪）
なかなか難しい作業だが、男としての遣り甲斐を感じる。
レオニードは舌を伸ばし、ミラダの蜜壺を穿りまわしつつ、右手の指をハウルカーラの膣穴に、左手の指をエルファバの膣穴にぶち込んで掻き混ぜてやった。
「はぁ、はぁぁ、はぁぁぁ」
「ひぃ、ひぃ、ひぃ」

「気持ちいい、気持ちいい、気持ちいい」
三種類の牝声を楽しみながら、レオニードは舌と指を忙しく動かす。
エルファバとハウルカーラは、外側の腕で自らの乳房を揉みながら、内側の乳房をレオニードの胸板に押し付けてくる。さらに余った手で仲良く、逸物を掴んできた。
ニギニギニギ……。
エルファバとハウルカーラの手が逸物を挟んで握手する。
二人ともまだまだ男に慣れているとはいい難いから、ぎこちない手つきであったが、協力して逸物をしごいてきた。
(二人ともなんだかんだ言ってその気だな)
逸物の温もりを手に感じることで、大人の女たちは一段と高まっているようだった。全身で快感を表現するように、激しく躍動する。
そんな女たちに翻弄されたレオニードは、丹田に気合いを入れて暴発させないようにしながら、指と舌を素早く動かす。そうしているうちに、三匹の牝犬たちの鳴き声は一段と甲高いものとなった。
「も、もう、あたし、らめぇ〜〜〜」
「ぼくも、もうらめっす♪　いくっす♪　いくっす♪」
「イクィィィィィィ〜〜〜!!!」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
**株式会社キルタイムコミュニケーション**
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

**http://ktcom.jp/**

竹内けん

Takeuti Ken presents harem series official guide

# ハーレムシリーズ

## 公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
**完全ガイドが登場!!**

特別描き下ろし
イラストも多数収録!

*Now On Sale!!*

A5判／定価990円(税込)

KTC 特設サイトはこちらからアクセス!! http://ktcom.jp/harem/

編集・発行 キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 ヨドコウビル TEL:03-3555-3431(販売) FAX:03-3551-1208

▶最新情報は公式サイトへ! キルタイムコミュニケーション 検索